

のさり、に込める 命への謙虚さ

寄稿 日本看護協会長表彰を受けて

日本看護協会長表彰を受けた
竹熊教授大学院保健科学研究科教授
竹熊 千晶

長年にわたる看護職の養成や在宅看護の啓もう活動などが認められ、大学院保健科学研究科の竹熊千晶教授が本年度の日本看護協会長表彰を受けました。受賞を機に、竹熊教授に寄稿しました。

学生時代、正直あまり看護師という仕事に興味が持てず、1年生の頃は「大学、辞めてしまおうか」と思っていました。ところが、実習がなんだかおもしろかった。今では考えられないけれど、学生だけで、自分たちが考えた看護の計画をいろいろやらせてもらえたのです。

絶対安静の心筋梗塞の患者さんの背部に手を入れて除圧したり、入浴できない劇症肝炎の患者さんに寝たままの洗髪をしたり。上手にできるわけがないから、今思えばそれこそベテランの看護の先生たちがこっそり手伝ってくれていたんですね。先生たちの配慮には、その時は気が付かなかったけど、自分がやった看護に対する患者さんの反応は、鮮明に覚えています。

病院に入院している患者さんへの看護も面白かったけど、当時、旧清和村（現山都町）に勤務していた高木保健師が毎年、大学に特別講義に来られていました（高木さんは清和村を定年後、本学でも地域看護の准教授として勤務されました）。病院以外の場所で、個別の患者さんの事例をくみ取りながら的確に保健施策につないでいく、こんな看護のやり方があるんだと思ったのは衝撃でした。

それから、保健師の資格をとって、私の仕事としての看護のはじまりは、昭和60年、旧御所浦町（現天草市）役場の保健師です。島で初めての保健師でしたから、授業で習ったとおりに地域のアセスメントをして、住民の健康増進、疾病予防、病気の早期発見のための活動に張り切ってしました。

ところが、ある時、寝たきりのばあちゃんを介護する娘さんに、「大変ですね」と声をかけ

たら、「なあん、私の“のさり”ですもん」とせせせとお世話をされている。ふと町内を見渡すと、脳卒中で麻痺のあるおじさんが「なんののさただろか」とつぶやきつつ、船に乗って漁をしている。ご存じのとおり、天草、御所浦町は漁業の島で、自然の驚異と共存しながら生活する人の多い地域です。老いることや病をもつこと、人間にとって抗えないことを緩やかに受け止めて日々の暮らしを営む姿は、自分自身も命に対して謙虚にならざるを得ませんでした。そういう人たちを仕事として支援することができる看護という仕事が面白くて、紆余曲折ありましたが、あれから40年！本学で教育研究に携わりながら、地域の仕事、看護協会の仕事、NPO「老いと病いの文化研究所われもこう」の活動もさせていただいています。

感謝ばかりの毎日です！

旧御所浦町時代、保健師として在宅の患者の世話を
する竹熊教授（左）＝昭和60～61年頃

添島さん、工藤さん（医学検査 学科4年） 最優秀賞

飯伏羲弘教授のスモールグループ（SG）に所属する添島萌華さん（医学検査学科4年）と工藤理紗さん（同）が、10（土）、11日（日）に大阪国際会議場で開催された第48回日本超音波検査学会学術大会のCongress Chairperson's Award-THE YOUNG Generations Awardで最優秀賞を受賞しました。

「超音波Elastographyを用いた筋評価の基礎的検討」と題した発表は、昨年度の卒業生が行った卒業研究をさらに進めたものです。飯伏教授の指導のもと、2人は口頭発表や質疑応答の練習を重ねてきました。

発表内容は、組織の硬さを調べる超音波Elastographyを使い、4種類の肉（鶏むね肉、鶏もも肉、牛肉、豚肉）を用いて筋繊維方向の違いでの超音波の伝わり方、再現性などを検討しました。

受賞した添島さんは「参加が目的でしたので、賞をとれた時は正直驚きました」と驚いた様子。工藤さんは「発表の仕方や質疑応答の練習をし

かり積んできたのが、賞に結び付いたと思います」と力強くコメントしました。

今回の研究をもとに、SGの8人は今年の卒業研究で人への応用について発表予定です。（入試・広報課）



演題スライドの前で、右から工藤さん、飯伏教授、添島さん



就職・実習支援課による「臨床検査技師としての働き方」講座が13日（火）、3109M講義室であり、医学検査学科3年次生が、大学卒業後の仕事や検査技師の役割について学びました。

同課職員で国立病院機構九州ブロックの元技師長でもある佐々木康雄さん＝写真＝が講師を務め、本学に届く求人や卒業生の就職状況について説明する一方で、「大学に届く求人がすべてではない。特に、県外の医療施設、一般企業を視野に入れている学生は求人サイトなども利用して、3年生のうちから情報収集やインターンシップにも参加した方がよい」と話しました。

さらに、卒業後の進路として、医療機関や企業、研究施設、公務員などを紹介。そこでどのような人材が求められているかなどにも触れ、「何事にも疑問を持つこと」、「常に相手の立場で考えること」など、臨床検査技師の心構えを伝えました。

（入試・広報課）



竹屋学長の激励を受ける選手

目指せ栄冠！ インカレ九州激励会

インカレ九州大会出場激励会が14日（水）、50周年記念館でありました。

出場するバレーボール男子、同女子、バスケットボール男子、サッカー男子の計42人選手が紹介された後、竹屋元裕学長と船越海斗学友会副会長（リハビリテーション学科理学療法専攻3年）がそれぞれ激励しました。引き続き、選手を代表してバスケットボール部の土田陽輝さん（同2年）が力強く選手宣誓をしました。（入試・広報課）

求められる人材に

医学検査学科
「働き方」講座

4年近い新型コロナウイルスの感染拡大で広がった、授業や会議、研修会、学会等の遠隔開催。そこで威力を発揮したのが、ビデオミーティングシステムZoomです。共通教育センターの山鹿敏臣講師は、Zoomを駆使して各種授業、研修、学術集会等の円滑な開催を支えてきました。その確かな技術には定評があり、教員、学生の区別なく頼りにされています。

「Zoom本格導入控え、あらゆる手法試した」



音響、映像機器に精通していることから、コロナ禍以前もさまざまな催しを技術面で支えてきましたが、決して「専門」というわけではありません。このため、Zoom導入直後は、「ノイズが入る映像を送ったり、音声途中で切れたり」と、苦労の連続だったといいます。

コロナ禍の拡大により、本学でも遠隔授業に備え、2020年に「Zoom・MS Teams ワーキンググループ」が発足、山鹿講師もメンバーとして技術の習得に励んだわけですが、「転機となった」と振り返るのは、2021年10月に本学が主幹校となり遠隔で開催された国際シンポジウムでした。

本番での英語のやり取りに備え、関係する教職員有志が約1年前から語学特訓。すべてZoomを使っての遠隔レッスンでした。「画面共有や参加者を小部屋に分けて個別にディスカッションできるブレイクアウトルームなど、この時に（Zoomの）ありとあらゆる手法を試した」と山鹿講師。細かい失敗を重ねることで、次第にスキルを上げることができたと振り返ります。新型コロナウイルスの感染状況に落ち着きがみられ、あらゆる場面で「対面」が復活しても、「黒子」としての仕事は途切れないといいます。

数年前から軽音楽部の顧問も務めています。「楽器は全くできないので、音響専門」のつもりが、いつしか「ボーカルに目覚めた」。久々に対面での開催となった昨年10月の杏祭でも学生バンドを従え、思い切りシャウト。「多忙な日々の中で、唯一のストレス解消法です」とはにかんでいました。（NL編集部）

◇

◇

※山鹿講師は20日、図書館主催の「私の部屋でランチを」に登場。「PCトラブルと私～コンセントが抜けていませんか？～」と題して、よくあるPCトラブルとその対処法について話しました。